

琉球大学学術リポジトリ

琉球語沖縄首里方言のモダリティ：
叙述・実行・質問のモダリティを中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎原, 正志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40991

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

琉球語首里方言の

琉球語沖縄首里方言のモダリティ：
叙述・実行・質問のモダリティを中心に

琉球大学大学院

人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 崎原 正志

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

ユネスコは、2009年に奄美語、国頭（沖縄北部）語、沖縄（中南部）語、宮古語、八重山語、与那国語の六つの琉球諸語を危機言語として認定した。本研究では、この中の沖縄語に含まれる首里方言を対象に、当該方言の「モダリティ」について包括的で体系的な記述研究を行った。モダリティとは、現実世界の事象を話し手が〈確認〉し、それをどのような目的をもって表現するかという文レベルの意味のことを指す。この文レベルの意味＝モダリティは、述語が大きな役割を担っている。したがって、述語の形式とその文レベルの意味の関係（多義性）を様々な文法的な観点（人称・テンス・アスペクト・利益性・情報共有などの違い）から明らかにした。例えば、「命令形＝命令文」という形式に傾斜した分析ではなく、「命令形」を用いた文が〈命令〉だけでなく、〈許可〉や〈非難〉を表す、というような記述を行った（〈山括弧〉は文のモダリティを指す）。

記述方法は、既存の談話資料および新たに実施した面接調査により用例を多数収集し、得られた用例をモダリティ形式ごとに分析した後、モダリティごとに分類し直した。分類方法は、宮崎和人他（2002）「モダリティ」および工藤真由美（2014）「現代日本語ムード・テンス・アスペクト論」等を参考にし、〈叙述・実行・質問〉の三つのモダリティを軸にして分類した。聞き手に事象の〈述べ立て〉を行う〈認識・評価・意志・希求〉の文は〈叙述〉に、聞き手に動作の実行の〈働きかけ〉を行う〈勧誘・依頼・禁止・命令〉の文は〈実行〉に、聞き手から情報をひきだす〈真偽質問・補充質問〉等の〈尋ね〉の文は〈質問〉のモダリティに下位分類した。文のモダリティは述語の形式にとらわれない。一人称を主語にした未実現の動作を差しだす文は、意志・断定・評価形式を述語に含む文が〈意志〉を、二人称を主語にした未実現の動作を差しだす文は、命令・否定質問・評価形式を述語に含む文が〈命令〉を表す。すなわち、文の《対象的な内容》が文のモダリティを決めている。